

---

暗唱聖句 「あなたがたは世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」

ローマ12：2

---

今週の聖句 ローマ12，13章

---

今週の研究：パウロは決して行いを軽視しているのではありません。彼はローマ13章から15章において行いを強調しています。このことは、彼が信仰による義について先に述べたことを否定するものではありません。対照的に、行いは信仰によって生きることの具体的な表現です。

---

月曜日：コリント第一12，13章と同様、霊的賜物について述べた後で、パウロは愛を高く掲げています。

パウロはここで、この愛を実際に表す方法について述べています。一つの重要な原則が明らかにされています。それは個人的な謙遜、つまり「自分を過大に評価」しないこと（ロマ12：3）、「尊厳をもって互いに相手を優れた者」とすること（12：10）、「自分を賢い者とうぬぼれ」ないこと（12：16）です。

クリスチャンはすべての人々の中で最も謙遜な人であるべきです。結局のところ、私たちは全く無力な存在、全く墮落した存在です。

私たちは傲慢し、得意がり、誇ることでできるものが何かあるでしょうか。何一つありません。私たちは神と人との前における個人的な謙遜という原点に立ち返り、パウロがこれらの聖句の中で勧告しているように生きるべきです。

---

火曜日：今日の世界であれ、残虐な支配体制はあちこちに見受けられます。しかし、そのような状況にあっても、クリスチャンは可能なかぎり自国の法律に従うべきです。政府の要求が神の要求に反しないかぎり、クリスチャンは政府を忠実に支持すべきです。時の権力に逆らうような行動に出る前に、祈りをもって、注意深く、また他の使徒の考えを参考にして、自分の取るべき道を判断する必要があります。

神に忠実に従う者たちが将来、世界を支配する政治権力によって迫害を受ける時が来るでしょう。（黙13章）。それまでの間、私たちはどの国に住んでいようとも善良な市民であるように神の前に最善を尽くすべきです。

---

木曜日：パウロはここで、目を覚まして、用心していなさいと、信者に勧めています。イエスの再臨

が近づいているからです。私たちはつねに、キリストの再臨が近いことを意識して生活しなければなりません。キリストの再臨は私たちの死ぬ時と同じだけ近いのです。私たちが来週死のうと、40年後に死のうと、全く変わりありません。死後、最初に気づくことはイエスの再臨です。死はつねに私たちの目前にあります。私たちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいています。

再臨は新約聖書における重要なテーマです。再臨と再臨のもたらず希望が無ければ、私たちの信仰は無意味なものです。「信仰による義認」も、この素晴らしい真理を完成させる再臨が無ければ、何の意味も持ちません。

s-----

ローマ12章は、コリント第一12章、エフェソ4章とともに霊の賜物のリストです。わたしたちの生命、そして能力もすべて神さまから与えられたものなのですが、それに気づかなければ、自分の思いだけに用いてしまうでしょう。けれども神さまが、みなさんの幸せのために与えられたという目的を知ると、使い方が変わってきます。これこそ能力が霊の賜物に気づいた時なのです。

そして賜物リストに続いて、権力に従いなさいとパウロは教えています。権力も神さまが与えられたもので、この地上において平穏に暮らすための社会秩序に従って生きるように教えています。

これに関しては、まちがっていただきたくないのですが、わたしたちは政権党を支持するように命じられているわけではありません。今日の日本のように民主主義の国においては、まず国民としての義務をしっかりと果たすことです。そして選挙に関しては、この日本のために、そして神さまの想いを実現するのに最適だと思われる政党に一票を投じればよいのです。結果として支持する政党ではない政府ができたとしても、その時は、その中で良き市民として役割を果たせばよいのです。

国をリードする役割も必要ですが、それだけでは国家は動きません。市民として支えるものが必要なのです。そのような意味では、それぞれの立場で、それぞれの役割を果たすことが賜物を用いるという12章の流れを受けついているでしょう。

13章の最後に再臨について教えられています。再臨が近いことを認識しながら、わたしたちができることは日常の与えられた仕事を果たして行くことが最善の備えなのです。パウロは、このあたりを語りたかったために、このような順番に主題を並べて行ったのではないのでしょうか。